
秋花集（詩集）

山之口 博道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋花集（詩集）

【Nコード】

N6575G

【作者名】

山之口 博道

【あらすじ】

古い引き出しの中に忘れられた詩稿が出てきました。懐かしい青春の詩集、今、老いた私はそれを懐かしみはたまた、綴れの取れた古書を修復するように、編みなおしたのがこの詩篇となった。ここには春の花は咲かない、しかし、それでよいのである。

自序

自序

青春は知らぬ間に私の前から消え去った。

今、私は自らの齢を数えるのである。

そして、しばしば、次のような言葉を呟いて、この落ち着かぬ心に言い聞かせたのだった。

「おまえの青春の夢の一切は終わったのだ。そして、もう二度と燃え上がることもあるまい。

夢見るのもう止める、そして日々の糧を稼ぐことに専心せよ。

おまえの青春の一切は終わったのだ。おまえの心胸の炎の種火は終わったのだ。」

しかし、私の心の中のおさまりきらぬ炎はかつての憧れを求めて思い出をなお、探るのだった。

そのような中から、放置されていたいくつかの詩稿が次第に形を成していったのだった。

乏しい心のなかから、生まれた野の花の思い出も私はここに付け加えたいと思う。

秋の花を、孤独の心にささげるために今、こうして詩集を編んだのである。

ここには春の花は咲かない。

しかしそれでよいのである。

第一編〜第三編

第一編 青春の物思い

生の弧線があたかも、真夏の昼を定めるように
私の干からびた心の中に
一人の少女の姿となってそれは現れた。

私の暗い小道に、踏みしだかれたすみれ草のように
その少女は微笑をさんざめかせたのだった。

一人の貧しい独身者が夢の王国に
従者と巨象を伴って入獄するように、
その少女はたちまち、一体の人形と化してしまった。

蝶の燐粉を塗りたくったような瞳はまばたき、
幼い子供たちが無心に遊ぶように、
一切の憂いはその中に消えていく。

だが、日々の営みとはなんだろう？
それはにがいせんぶりのように、人間の口に合わない。

更に、人間のささいな過ちを捉えて
運命はいやと言うほど、私達を叩きのめすのだ。

あやうげな野の花は言う。

「私の生がその明るい大気の中で永遠に、花開くように。」

しかし、無残な嵐は雨粒を叩きつけ
いりつけるような炎暑は

たちまちその小さき花を引き裂き蹴散らしてしまうのだ。

だが、嘆くのは無駄なことだ

なぜなら、私達の生がそのような重荷を負うことは
決して無意味ではないからだ。

そして、澄み渡った青空の下で

一人の人間が死ぬと言うことは

恐らく一つの始まりでもある。

なぜなら底から神的な生が

恐らくつむぎだされるのであろうから。

第二編 日々の傾斜

日が短く、朝が寒くなる頃

峠に人気もなく

木々の葉は赤く色づく。

小川の流れはためらい、

また、足早に立ち去る

大洋の懐に流れいるまで

なぜだろう？人間の思いが

秋の中では沈みがちなのは
私には秋はたのしいのに。

曲がりくねった山の廃道は
古びた藁葺きの家が
寂しげに建っているだけでいいのだ。

たとえそれが遠い地で汗して働く
孤独な人間にとっての
ふるさとの廃屋であるとしても。

第三篇 あこがれ 憧憬

いにしえの賢者は幼い私を捉えてこう諭す。

「あこがれなどまやかした。

ただひとつたよりになるのはひそかな中庸だけだ」と。

だが、私は諦めることなどできない。

果てしない放浪への衝動を

鉄鎖を解き放つ苛立ちを

心胸の中に燃え上がるこの炎を

それらを抑えることなど出来ない

そして、私は自らの心に、こう諭す。

「憧れが私の心に死ぬとき

私の全ても死ぬのだ」と。

第四編く第六編

第四編 人間の運命

生い育つやさしいかけ
私の人形が目をさます
その春の日に私の心もまた
純真によるこんでいた頃

野辺に光はたわむれ

子供たちの心も浮き立ち波騒いでいた

「一切は可能だ。この春の日には。」

私たちは声をそろえて心からそう叫んでいた

だが、私達の前に、彼方の国への旅立ちを説く人が現れたのだ。

幼い私達が、その呼びかけを振り切るなどできるはずもなかった
わたしたちは旅立ちの思いで湧きかえっていた、
なぜならそれをまちのぞんでいたのだったから

幾たびか、春の日が経巡り、時は過ぎ去った。
あてどない、放浪の中に私たちは自分がもう、
若くないことを発見して呆然とするのだった。
ある野辺の泉のほとりで水を飲もうとして思わず湖面を見つめたとき。

がつくりと膝を落として、私たちはあの永遠の春の日を振り返る
しかしもうどこにも

私達の心の片隅にさえそんな春はない

私達の青春の時間が終わってしまえばもう二度と戻らないように

雪が吹き荒れる冬の夜になぜやすらう家もなく
見知らぬ町をさすらわなければならぬのか
皆が祝う新年になぜ私だけ一人で
虚しさに怯えなければならぬのか

ああ、春の日に私達がやすらっていたころ
私たちは青春が失われることなど知りもしなかった
そして、老年がかくも人間を
打ち砕くかということを考えもしなかった

しかし、傷心は永遠に続くしかあるまい
わたしたちの夢見がちな思念が崩れ去り
黄金色の青春が失われた時
私達の一切はうしなわれてしまったのだから

第五編 思い出に

かつて太陽は光り輝き
ぶどうのつるには
むらさきの玉がすすなりにみゆる

娘達の顔にはよるこびが

そして、希望が光り

若やいだ気分が私をも包んでいた

山々は青々とそびえ

林道には小鳥が鳴き渡るのだ

そして、樹間には青い波が続く

冬が訪れ、私の心も雪にとざされる

そして、もう、笑いは消えうせ

ただ、吹雪が荒れ狂ううだけなのだ

第六編 生の思い

人間はいつでも放浪を

果てしない逃亡をもとめている

だが、日々の生活が人を虜にしてはなさないから

やむを得ず、日々をおくっているのだ

そして、虚しさに耐え続けているのだ

ある日、神秘的な声が呼んで

日々の不毛なすべからその人間を解き放つようにつながすまで

その日が来るまで

人は人間に身をやつして

この生活を仮に送っていくのだ

第七編 第九編

第七編 人の世の定め

死が私たちにとって必然のおきてであり

生はまさに茨の道でしかない

苦悩は永遠に追いつがり

いらだちと絶望も消えることはない

生こそ地獄であり死はむしろ楽園である

ではなぜ私たちはすぐ死を求めずに

なおも生きようともがくのだろうか

私には分からない

百年と生きられるわけではないこの人生

しかも、それはありとあらゆる苦しみに引き裂かれている

そして、あわれなむしけらにすぎぬ私たちは

血を吐き、膿にまみれて

死への道筋をまるびつつあゆんでいくだけなのだ。

いかなる慰めもなくいかなる希望もなく

ただ、死と欠乏の不安に怯えながら

第八編 日々の生へ

日々のなりわいのむなしさが人を襲うとき
人は来し方を振り返りふるさとへ思いをいたす
大都会の下で孤独な青春を過ごしていた私に
その一人の友は言っていた

「帰ろう、ふるさとへ、」

その永遠の慰めの中へ、

僕はもう都会に疲れ果てた」

だが、その友も今は死んでしまった

都会の果てで誰知ることもなく

そして私は地上に一人取り残されたのだ

やがて地下の静寂の国で再会できるまで

私はこの茨の道を歩き続けるしかない

それが私の今生だったのだ

それが私の運命だったのだ

第九編 神殿に

人間があたかも、巨像のように

ひとつの必然に引きずられるとき

そこには、強い甘さしかあるまい

狭められた視界に

一羽の小黒い鳥が巣立ち

生の思い出がうづく頃

私の心の中にふたたび、
法と規律がよみがえりそれまでのふしだらな思いを撃って
あのふるい言葉をみずからに眩くのだ

「楽園とはこの上なく厳格な真言なのだ」と。

第十編〜第十三編

第十編 放浪者たちの生へ

見よ、いま上りつつある太陽を

私達の日々の物憂い歩みが

一瞬ゆすぶられて押し出される朝

私は恐らく、一人のさすらい人として

再び今日の日を馬車の上にゆられるのだ。

ああ、若々しい春はかつて野に満ち溢れていた

夏のキラキラした太陽は恋人のように輝いていた

私の心にいつまでもうすれない一つの青春があり

私は女神の像をこしらえてそれに思いを打ち明けたのだった。

私の心は幼いあこがれに打ちのめされ

あたかも、祭りの前日に眠れないではしゃぎまわる子供のように

喜びに震えた

陽気な音楽が奏でられ

人々は生活を忘れて踊り狂っていた

だが、やがて、野生の芥子の花に

一匹の蝶が近づき、野ウサギは

首をかしげて目を輝かせた

ひばりはくちばしを動かし

ホオジロも花冠に泊まっている

朽ちた馬車がそこにうち捨てられている
そうして、老いたさすらい人は
静かな夢想の時を過ごすのだ
うさぎの子のようにまどろみながら

時はうつすらと四季を彩り
墓地はしらじらと月光にけふる
一切の夢が終わってさすらい人は
そこに深々とやすらっている

いかなる騒乱も乱すことの出来ないそのなかに

第十一編 時の流れ

時は底を流れ
人は船人となって流れを下る
夜に日をついで
いくら働こうとも悩みはつきない

山々から川は端を発し
やがて緑豊かな平地に達す
小魚は群れをなし
釣り人をからかいながら泳ぎ回る

夜となり川辺に炎は踊り
舟こぐ人々の宴は始まる
川面に水鳥は羽を休め
悩みなく眠りにおちる

いつの日か私にも訪れよ
その甘い休息の時が
この疲れた魂に

永遠の慰めが与えられることがゆるされるならば

第十二編 秋の想い

外には秋の太陽が照り輝いているのに
私は家の中で古ぼけた書物に読みふけっている

日々新たな光をふりそそぐ太陽神よ
その下で酒神は酔ったまま駆け回る

火のついたような紅葉が山々を覆いつくし
木々ははらはらと枯葉を限りなく降らす

私の思いはいつしか抜け出して
あの、山林を落ち葉を踏みしめながら歩き回る

黄金の秋陽が、林の中に木漏れ日となって散乱し、
遠くで犬の吠え声と猟笛が聞こえる

そうして、澄み渡った秋の昼を

私は一匹の大鹿に姿を変えてさまよう

絨毯のような朽ち葉をくるぶしまでうずもれさせながら
うすら寒いそよ風を感じて枯葉の寢床に眠る

何の悩みもなくまた、わだかまりもなく

秋の日のしみついた枯葉のにおいに包まれて

第十三編 夜のさまよい

夜の中へさまよい出よう

君は聞かないのか

静かな風の音を

それは永遠に神秘を語り

森のさやぎをつたえてくれる

夜の中へさまよい出よう

野原は草が静まって

うっとりとまどろんでいる

その上に月はその銀の砂を撒き散らす

夜の中へさまよい出よう
谷川は波をきらめかせ
夜の静けさの中を流れる
露にぬれた木々からは
しずくが落ちて小雨とまがう

夜の中へさまよい出よう
荒れた西洋庭園に噴水は静かに夢をつむぐ
また、彼処には大理石像が
永遠の瞑想にふけり続ける
夜の中へさまよい出よう

第十四編 秋の花

幾たびか、山河を越えてきた。

明るい日ざしの下私の旅立ちが始まった。

そこはかかない春の香りがしてそこは早春の野原だった

草花は咲き乱れる高原の別荘地に歌声が弾んでいたあの頃、
もう2度とは戻らない青春の日々、

私の妖精もそこでは悲しみ知らぬ下に飛び回っていたっけ。

木々にみどりがまぶしい頃私は遠い旅立ちについたのだった。

山々はくつきりと濃緑に染まり一面に若葉の生き生きした香りが漂っていた。

私はいくつもの山山を越えて遠い国へと出稼ぎに行くのだった。

もう帰り来ることもあるまい。

私はふるさとの山河にあっさりと別れを告げた。

ふるさとは老父母を残してかすんでしまっていた。

異国での生活は活気を呈して私は商売で成功を遂げるようになっていた。

ある出会いから妻も娶ったし、子供にも恵まれたのだった。

家も建てたし、たくわえも僅かだが出来た。

そして秋のある日。異国で戦い続けてきた私の体にある異変が、
大きな病気をして入院して手術もした。幸い大事には至らずに3ヶ月で退院できた。

しかし、私の体力に限界が着つつあることはもう明白だったろう。

冬の日々、私は自分の顔を見て驚いた、
なんと言う老人がそこには、いたことか。
髪は白くすすけて、頬はシワだらけ、一体誰だ？

紛れもないわたしの老いた姿がそこにはあった。
ふるさとを離れたはや37年もたっていたのだった。
私のふるさとへの思いは強まった。

長いやつと冬があげて春が来ていた。

春はこんな老いさらばえた老人のもとにも忘れずにちゃんときてくれたのだ。

春は私をかりそめの元氣をもたらしでもくれるのだった。

そうだふるさとの春へ巡り合いに行こうか

そんな思いが去来しても不思議はなかった。

そんなに悩ましい郷愁に駆られる春の夜だったのだから

私は再び幾多の山河を越えてふるさとへと向かった。

そして長いたびの果てにたどり着いたのは紛れもないふるさとの村だった。

しかしそこはもう荒れ果てて父母もとうに亡くなり家も廃屋と化していたのだった

私の人生行路とは一体なんだったのだろうか、

幼子がかどわかされて旅芸人一座に加わり諸国を巡業して回りある日偶然ふるさとを通りかかったように

私も人生にかどわかされていただけなのだろうか

そしてそんな故郷の村にたどり着けばいつもそこは雨だったというさまよい人の悲しい伝説にしかないのだろうか。

第十五編 地上の旅人

人この地上に生れ落ちて、母の胎より出しより、我等皆地上のさすらい人なり。

不毛の地をさまよい今日は南の国をさすらい、明日は北の国をまたさまよう。

一滴の水を求めて、一片のパンを請うて、

あちらの泉を、こちらの穀倉を、あてどなく請い歩く。

飢えた心は、ひたすらの愛を求めて、異邦人の国を、さまようばかり。

若き日はたちまち過ぎ去りて、あつという間に白髪のおじいさんとなつている自分の姿に今更ながら、

呆然と立ちすくむ。

一体あの、若くて活力にあふれていた日々はなんだったのか？

まるで夢のように、いま、老いばれ果てた自分が地上にいるばかり。

大地は往時のようにまだ熱く脈打ってはいるようだ。

しかし、それに応える気力はもう私にはない。

うなだれてあてどなく未だにこの地上をさまようばかり。

ああ、どこに、緑の楽園はあるのだろうか？

そして、この飢え乾いた心はどここの王国でみたされるのだろうか？

永遠の流浪の民、そうだ。

人は誰も皆この地上をさまようしかないのだ。

どこにも憩うべき水辺はない。

また、まどろむべき絹のしとねもない。

生きている限り、人は幻の愛を求めて、永遠の癒しを求めて、

地上の国をさまようしかない。

そしていつも裏切られて、この陋屋に帰り来るしかないのだ。

恐らく、この渴きを癒すべき、神の飲み物はこの世には絶対にあるまい。

そして、永遠の安らぎのアルカディアはどこにも見つかるまい。

それが人間の宿命なのだ。

乾いた地上をあてどなく彷徨いあるくだけが、今生の取り分なのだ。

そして、ある日神が呼ぶとき、つまり、生命が尽きるとき、人はや
つと、

かろうじて、大地の胎に帰一できて、地底に深く安らぐことができるのだろう。

それまでは、その日が来るまでは、

今日は東の喧騒の国を、

明日は西の荒涼の国を、

この肉体を引っさげて、あてどなく、彷徨いつ続けるしかないのだろう。

それがこの世での、神の定めた、人間の取り分だったのだから。

第16編 生の闇

夏の暑さがやつとなごむ頃
涼風がかすかに秋を告げる頃
蝉の音がさほど気にならぬ頃

疲れた人々が夕方
家路につくように
私の重荷もすこし
軽くなるように感じるひと時

生の日々は穏やかに移ろいやすさを減じるようだ
太陽は秋の日差しになり
其の炎を抑えつつある

秋の日を待ち望む一人の旅人
弱弱しくまた、幼い人々の中に
私の影も引いている

もし、苦悩がコロシムの中に
私を引きずり出さないならば
生の時はあまりにもろく切ないだろう

もし、哀れな私を一瞬でも
聖なる太陽が照らし出さないならば、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6575g/>

秋花集（詩集）

2010年10月19日02時39分発行